



スタイリッシュ・カリズマ

第五回

ベンジャミン・ Дизレリー

中野香織=文

by Nakano Kaori

学歴がゼロ。

社会の主流を担う民族ではない。

こんな二大ハンディキャップを背負った男が、社会の表舞台で名を馳せる大物になりたい、という野心を持つ。

その野心を、人々の好奇の視線をひきつける大胆な服装術と日和見主義(オポチュニズム)という、これまた王道をいこうとする政治家にとっては二大ハンディともなりうるようなやり方によって、実現してしまった男がいる。

それが、ベンジャミン・ Дизレリー(Benjamin Disraeli 1804-81)だ。

1868年、および1874-80年に英国首相として活躍、ブリティッシュ・エンパイアの政治的・経済的基盤を確立して、ピーコンズフィールド伯爵に叙せられ(1876)、ビクトリア女王の寵愛を受けたことで知られる、19世紀を代表するイギリスの政治家である。

生まれもったハンディも、好奇の視線も、すべてプラスのエネルギーに転換してしまった。さらに偏見にとらわれることなく、日和見主義が生む絶妙の効果を活かしきった。彼はいったいどんな人物だったのだろうか。

挫折の連続だった若き日

Дизレリー。

この姓の意味するところはDisraeli、すなわち、「イスラエルより来りし(人)」である。ベンジャミン・ Дизレリーの先祖は移民ユダヤ人であった。

10代のはじめにキリスト教に改宗してプロテスタント系の学校に行くがすぐに退学、もっぱら家庭で父アイザックの蔵書に埋もれて読書三昧の日々を送った。

17歳で弁護士事務所にて徒弟奉公の形で勤務するが、この仕事にはすぐに飽きて退職する。その後、信用取り引きや株に手を染めるけれど、これも大失敗、多額の借金を背負う。

また、金融投機に批判的だった「タイムズ」に反対して「レブリゼンタティヴ」という新聞の刊行を提案し、発刊までこぎつけるものの資金繰りがうまくいかずまもなく発行停止になる。会社は巨額の負債を抱えることになってしまった。

この頃の Дизレリーは、「何者かになりたい」という強烈な野心が先走るだ

けの山師のように見える。

しかし、あいつが大失敗と多額の負債による挫折感のなかで、 Дизレリーの野心は萎えるどころかますます燃え立っていったようで、彼は大物政治家になろうと決心するに至る。

1832年、補欠選挙に立候補する。しかし落選。 Дизレリー、28歳のときである。その後、5回の選挙に出馬し続けるが連戦連敗。

その選挙キャンペーンのすべてにおいて、彼はユダヤ人としての出自が嘲笑の的になっていることを痛感する。有権者を前に演説をおこなったある時には、「古董」だの「シャイロック」だのという罵声を浴びせられたという。

おまけに、当時の英国の政治家にとつての正規の教育の場であったパブリックスクールにも大学にも通ったことがなかったのだから、有権者が Дизレリーを敬遠するのは当然であったかもしれない。

ユダヤ人の出自。学歴ゼロ。二大ハンディと闘って苦節5年、1837年に Дизレリーは晴れて国会議員に当選する。というと、なんだか堂々たる政治的信

念を貫いた結果の汗と涙の勝利というイメージを思い浮かべたくなるが、実情はそのイメージとは相当ずれる。

彼の場合、表舞台(「政界」)に進出できたのは、裏社会(「社交界」)で知名度を上げたことが非常に大きく役だっていたのである。

友には微笑みを、世間には嘲笑を

そもそも、社交界って何だろう？

一見、政治や経済の実権を握る表社会とは価値体系をまったく異にする別世界であるにもかかわらず、実は表社会とは奥のほうであいまいに通じ合っているような裏社会、と言えようか。

家柄よし、学歴よし、財産あり、人望も才能もあり、という完璧な条件を一つでも欠いた野心家は、まず社交界で名を上げるのが表社会へ入る近道だった。

それでは社交界で名を上げるためにはどうすればよいのか？
道徳だの常識だの勤勉だのといった、表社会で尊重される価値観は、社交界で

はほとんど意味をもたない。人に強烈な印象を残すような、いわゆるいいがたい個性の魅力があるかどうか最大の鍵になるのである。

しかも時代は1830年前後。前回紹介したブランメル全盛期は過ぎているものの、ブランメルかぶれの有象無象の「ダンディ」たちが社交界を牛耳っている時代であった。社交界の仲間入りをしたいと望む新興ブルジョワは、ダンディとしてふるまうためのマニュアルを求めた。それに答えるような形で書かれた小説群が大ヒットをとばす。「社交界小説」、別名「シルバー・フォーク派小説」(高貴な生まれを意味する銀のスプーンをもじった命名と思われる)というカテゴリーでくくられる一連の小説がそれである。

なかでも、「ダンディズム入門書」としてイギリス国内ばかりかフランスでも版に版を重ね、社交界小説の主人公人気取りの男を町中にあふれさせた、と伝説的に語られている小説が、ブルワー・リットンの「ペラム あるジェントルマンの冒険」(1828)である。現実世界での

ダンディの王がブランメルであるとするならば、虚構世界でのダンディの王はペラムであった。

そしてなんと、われらが Дизレリーもこの社交界小説の作者として名を連ねているのである！

彼の小説第一作めは「ピリアン・グレイ」(1826)。権力への野心に燃える青年の物語であるが、緻密な観察に基づく社交界人士のスケッチが光っている。

その後彼は「若い公爵」(1830)、「コンタリーニ・フレミング」(1832)、「ハンリエッタ・テンブル」(1837)……とシルバー・フォーク派小説を続々発表し、文筆の才を世に知らしめていく。(参考までに、「コンタリーニ」は日本語にも訳された。福地源一郎らの手によるもので、「昆太利物語」という微笑ましい題名がついている。)

社交界小説の名手として名を上げながら、 Дизレリーはどのような目で社交界を見ていたのだろうか？

完璧な条件の揃ったリットン卿は、「ペラム」のモットーとして、「自分自身をうまく支配できるようになれば、世界

The Genealogy of the Stylish Charisma

全体を支配できるであろう」という、いかにも貴族の坊っちゃん的な甘っちょろい言葉を掲げているが、ディズレーリは世の中の厳しさを身をもって知っている。「ビビアン」に掲げられたモットーはこうである。

「友には微笑みを、世間には嘲笑を。これが世界を支配する方法である」

もちろんこれはフィクションのなかでのモットーであるが、後に「世論などと呼ばれているものは、ほとんどが大衆の感傷である」などと公言していることから推し量るに、あながちディズレーリ自身の本音でないとは言いつてもいいのである。

狙いは、 センセーショナルな印象

1830年代からは、文筆家として名を上げるとともに社交界にも本格的に食い込んでいくのだが、社交界においてディズレーリ自身が与えたインパクトはどのようなものだったのだろうか？

彼が意図したことはただ一つ。人々の注目を集めることだった。

センセーショナルな印象を与えることを狙った彼は、昼も夜も黒づくめだった当時のジェントルマンのドレスコードに逆らって、たとえばリーゼントストリートをこんな服装で歩く。

ブルーの上着、ライトブルーのミリタリートラウザーズ、赤いストライプの入った黒ソックス、奇抜な靴。

こんな男に出会ってしまった人々の反応やいかに。ディズレーリ自身の表現を借りよう。「人々は私のために道を開けてくれた。まさしく紅海がまっぴたつに割れたようだった。モーゼが率いるイスラエル人が渡ったという紅海もきつとあんな感じであつたらう」。

夜は夜で、たとえばリットン卿と同席



ジョン・マッデン監督「クイーン・ヴィクトリア 至上の恋」
配給：松竹株式会社

した食事会では次のような装い。

「緑のベルベットのズボン、カナリア色のベスト、甲が大きく開いたローカットの靴に銀色のバックル。袖口にはレースがひらひらし、髪は巻き毛になっている」

以上は、ディズレーリの服装と会話術に強烈な印象を受けたリットン卿の弟、ヘンリー・ブルワーの回想である。

しなやかな、良心派

このような強烈な存在感をふりまき続けたかいつて、社交界において「語られる男」となったディズレーリは1837年、念願の下院当選を果たす。

ここで注目したいのは、彼の政治的立場の変化である。

5年前に出馬した頃は、トリー党（保守主義の王党）にもホイッグ党（トリーと対立する党で、のち自由党に発展）にも属さない、急進的民主派として自分をアピールしていた。

ところが当選した37年には保守主義を掲げているのである。

そのほうが当選しやすいから「転向」したのであろうと憶測する向きは、ディズレーリを日和見主義者と呼んだ。

しかし、彼のその言葉から連想されるような軽薄な男ではなく、世の本流に乗りがかりながら効率よく改革を進めていくのが最も現実的である、と考えるフレ

キシブルな現実主義者であったことが次第に明らかになる。

たしかに当選当初は、保守党員として議員になりながらも奇抜な服装に身を固め、世論を考慮しながら好機を見据えた大胆な改革を行うべき、と演説するディズレーリは議場の嘲笑をかかった。「保守党による政治上の大改革」なんて言語矛盾もいところである。

そんな嘲笑に対しても、彼は「今にわたしの正しさがわかるだろう」と平然と構え、「イギリスを救うものは古いトリー主義でもなく、新しいラディカル主義でもない。新しい状況を古い伝統のなかで受容しようとする、新しいトリー主義である」という立場を貫き、実際、改革派議員の大改革を次々とやってのけたのである。保守派でありながら。

既存の政体や社会への批判は、お得意の小説という手段で世に問うた。「コニングズビー 新しい世代」（1844）、「シビル 二つの国民」（1845）、「タンクレッド新十字軍」（1847）がその代表3部作である。（うち「コニングズビー」は「政談余談 春鶯囀」として日本語訳され、多くの読者を得た）

これらはもう軽い社交界小説ではない。国の問題に対する真剣な対策を提示した政治小説である。イギリスには富者と貧者という「二つの国民」が存在する、と喝破した「シビル」などは、19世紀中葉



通人たちの集い

の英国の状況を最も的確にとらえた書として、文学史・社会史上にも燦然と輝いている。

彼が「大衆の感傷」である世論をことさらに重視していたというイメージは、映画「クイーン・ヴィクトリア 至上の恋」で描かれるディズレーリ像にも反映されている。

「国を支配するのは世論だ……まず風向きを見よう」と言っただけでディズレーリを、作家でもあるアントニー・シエールが熱演している（議会で演説シーンといい、女王の「友人」ブラウンに紹介されたときの表情といい、ディズレーリにまつわる細部を研究し尽くしたという彼の演技は圧巻である！）。

たしかに彼は、世の風に逆らわないという意味では日和見主義者であった。しかし、実際は、主義などという固まった観念にふりまわされることなく、現実を見据えたうえで改革も伝統保守もバランスよくやってのけた、まことにしなやかな良心派だった。

借金の担保は ブリティッシュ・エンパイア

1868年、ディズレーリは64歳にして首相となるが政権は長続きしなかった。しかし1874年に、帝国主義政策を掲げた彼は選挙で圧勝し、再び首相となった。

この第二次ディズレーリ政権において、彼はブリティッシュ・エンパイアの屋台

骨を不動のものにする。

75年にはスエズ運河を買収。このとき彼のユダヤコネクションが大きくものを言い、ロスチャイルド家から資金を借りて買収に成功した（このときディズレーリが借金の担保にしたのがブリティッシュ・エンパイアであつた！）。

77年にはビクトリア女王をインド女帝に推戴し、インド帝国を成立させる。78年には自らベルリン会議に出席して新興国ロシアの南下政策を阻止し、「名譽ある平和」を実現する。その間、女王の寵愛ますますするわしく、76年にはピーコンズフィールド伯爵に叙せられる。

ピーコンズフィールドとは、彼の処女作「ビビアン・グレイ」のなかからとった名前であつた。

最後に服飾史においてディズレーリが果たしたとおぼしき役割を付け加えさせていだけだ。

誕生期にはインフォーマルな寛ぎ着として軽んじられていたラウンジスーツを最初に公の場に着ていった要人は、ひょつとしたらディズレーリではなかつたかと筆者は憶測する。

右上の図は1870年の「テイラー&カッター」誌。当時の正式な昼の装いは左の小説家チャールズ・ディケンズのよう、フロックコートにトップハットである。□まわりには当然、ひげ。ディケンズは典型的なビクトリアン・ジェントルマンの風貌である。

右のラウンジスーツの紳士がディズレーリ。首相になってからはぐつと落ち着いた装いになったとはいえ、かつては奇抜な装い好きで、「ディジー（くらくらつとさせの意）」とまで呼ばれたディズレーリである。ラウンジスーツ姿でさつそうと現れ、人波をまっぴたつに割ったかもしれない……と考えるのはかなり楽しい。